

共生のきずなを求めて!

# NPO 現代座

2012 年 8 月 1 日 発行  
(通巻 454 号)

## 現代座レポート No. 51

- ・『友の呼ぶ声』 巡演開始 (1)
- ・長野県公演の取り組み (2) ~ (3)
- ・『遠い空の下の故郷』の活動 (4)
- ・「壁が落ちた! 騒動記」 (5)
- ・NPO 現代座を支える人々 ト部美佳子さん (6)
- ・「現代座会館の催し」劇場講座、SPレコード懇談会 (7)
- ・アリアンサ移住地『創設八十年』出版へ (8)
- ・新入会員・継続会員・寄付者のお名前 (8)

NPO 現代座ホームページ <http://www.gendaiza.org/>

特定非営利活動法人 NPO 現代座 発行責任者：木村 快

〒184-0003 東京都小金井市緑町 5 丁目 13 番 24 号 TEL 042-381-5165 (代) FAX042-381-6987

### 『友の呼ぶ声』 巡演開始



この作品は一九九七年、当時日本俳優連合副会長、PAN (芸術文化振興会) の議長として NPO 法成立に力を尽くされた故江見俊太郎氏の熱意で制作された『蒼い空』を原作としています。『蒼い空』の精神を継続したいと江見夫人松風はる美様の協賛を得て、また音楽も『蒼い空』の福沢達郎氏に協力して戴き、二〇一一年ユモレスク劇場用作品『蒼い空・友の呼ぶ声』として改作し、上演しました。

この作品は、元特攻兵士が、戦友に託された遺品の国語辞書を遺族に届けるべく、震災後の神戸の町を訪ね歩くことによって、豊かさを追い求めて生きてきた自分たちの生き方を振り返り、ボランティアの若者たちに助けられながら、新しい生き方を見出していく話です。

くしくも稽古初日の最中に突然地震が起こり、それが 3.11 大震災でした。その後の惨状が伝えられるに従って、この作品はぜひ、震災に打ちのめされた人々の心の復興を考える作品として上演してみようと考えました。

小さな試みのつもりでいたところ、その反応はわたしたちが予想した以上に強いもので、あらためてこの作品を地方巡演できないものかと考えはじめました。

人の集まることが困難な時代ですから、現在の私たちの力ではとても十分なことはできませんが、せめて自分たちができることで力を尽くしたいと思います。

小ホールで上演した作品を、果たして標準的なホールでも上演できるかという点で、この一年間さまざまな試行錯誤を繰り返して、やっと出発点にたどりつくことができました。

『友の呼ぶ声』の制作にあたっては、NPO 現代座会員山本担さんのおばさま故永野光子様の「世の中の役に立つ仕事に使ってほしい」との遺言で、二十万円のご寄付を戴きました。お志の生きる仕事として努力してまいります。

NPO 現代座 一同

## 『友の呼ぶ声』 長野県公演の報告



【塩尻市】五月十一日(金)

塩尻市 えんぱーく

塩尻市の市民交流センターである「えんぱーく」は図書館をはじめ、さまざまな交流施設、商工会事務所などを合体したビルで、その三階の一角に九〇席程度の多目的ホールがあります。

会議やパネルディスカッションで使用することが多く、演劇上演などは想定外で、客席からはガラスの壁の外の通路が丸見えという開放的なホールです。天井も低く、

上方から照明を当てることも困難です。管理責任者も、「もし、ここで演劇が上演できるのなら、このホールの用途も市民のためにもっと活用出来ますね」と期待されていました。実は塩尻市には、演劇上演が可能な「塩尻レザンホール」があり、これまでの「虹の立つ海」や「約束の水」はそちらで上演しました。

スタッフにとっては不安いっぱいでしたが、新しい試みへの挑戦です。セットなどの道具は、実行委員の方々の手で無事三階のホールへ運ばれ、前日から準備を始めました。

昼公演は九十人、夜は百十人。舞台のない平土間でお客さんに囲まれての上演は素晴らしい一体感が

あります。一同、「やっぱりこれが演劇の原点なんだね」と感動しました。

これからの取り組みの参考になるようにと、ビデオカメラマンの桑原さんが一通りの行程を記録してください、現在、編集を進めています。

一回目が終わると、ロビーでお茶の接待付きで役者を囲んでの交歓会です。これは実行委員会の丸山さんの発案でした。みなさん、本当に間近なところで展開される「友の呼ぶ声」の世界を楽しんでいただけたようです。新しいセットも好評でした。

「最後に背景が青空になったとき、青空だ！と叫びたくなった」との意見に、心から「良かった」と思いました。ぎりぎりの取り組みに挑戦してくださった実行委員会のみなさんに感謝します。(今村純二)

【松本市】 五月十三日(日)

松本音楽文化ホール

松本市も昼夜二回の公演です。会場は松本音楽文化ホールの小ホールです。ヒマラヤ杉などの、いっぴいの新緑に囲まれたすばらしい会場でした。当然、今回は小ホールを使用しました。荘厳な大ホールに比べて、小ホールは何となく親しみやすい雰囲気を持っているからです。

客席は百五十席ほどですが、舞台は広さも高さも照明設備もすべて本格的な中ホール並みの規模です。今回あえて、両極端な舞台での上演を試みたわけです。

会場の仕込みが終わる頃はロビーには健康友の会お年寄りがおおぜい待ちかねていました(下段右写真)。客席はステッキが必要な年配の方が多く、帰り際涙を浮かべ、私は終戦の時二十歳で女子挺身隊として働いていました、という八十七歳の方の姿も。震災で苦しんでいる福島の人たちを見ている、手をさしのべたくてもどうしようもない年寄りであることが切ない



おっしゃっていました。

一方若い人のアンケートにもぜひみんなに見てもらいたい演劇だとの言葉があり、力強く思わされたものでした。

客席は昼夜とも満席になりました。実行委員会の成功打ち上げの会もおおぜい集まり、苦労はしたけれど、やってよかったという感想でした。

作曲の福沢達郎氏も随行され、「こうした形式なら、ピアノの生演奏でやれるとすばらしい」と意欲的でした。本当にそんな日が来てほしいと思います。

(今村純二)



上の写真は飯島町文化館ホール。客席500の標準的な地方文化ホールです。客席空間もゆったりしており、天井も高く、照明設備も完備しています。

塩尻えんぱーくの場合はマンションのワンフロアのような狭い空間です。しかし、舞台装置は全く同一のものを使用しました。これは装置に付属した補助光と組み合わせで効果が出せるからです。



【飯島町】五月十五日（火）  
飯島町文化館

「約束の水」以来四年ぶりの公演。前回の実行委員長・知久平さんが、昨年現代座会館で行われた「友の呼ぶ声」を観に来ていた事から、「ぜひ飯島町で」といいじま文化サロンの企画として提案してくださり公演が実現しました。「いいじま文化サロン」は、官民一体となり、町在住の映画監督後藤俊夫さんが代表を務め、会員の人たちがいろいろな文化事業の企画・運営を行っている団体です。さらに前回の実行委員会有志の人たちが、「現代座公演を観る会」をつくり「共催」という形で応援し、チケットを広めてくれました。

雨の中来てくださったお客さまは、いつも文化サロンの行事に足を運んでいらっしゃるお客さん達で、あたたかな雰囲気劇場になり、前回の公演を観てくださったという方も多く、帰りがけに「前回も観てるよ」と声をかけてくださるのはとてもうれしい事でした。

人口一万人弱の町で町民の人たちが気軽に足を運べるような企画運営をされている「いいじま文化サロン」。

サロンの運営委員のみなさん、「現代座を観る会」のみなさんに感謝すると共に、貴重な存在である「文化サロン」が、これからも町民の方達の力で人々が集う文化の場を創ってほしいと願っています。

（吉野由美子）

## 『友の呼ぶ声』 今後の上演予定

【安曇野市】 安曇野市は「きけわだつみのこえ」の上原良司の出身地です。松本市公演をご覧になった西村忠彦さん（八十二歳・二〇〇五年わだつみのこえ六〇年の会代表）が、上原良司と重なるものを感じたと取り組んでくださっています。西村さんに励まされながら、「あなたの心に、良司の声は届いていますか」と、安曇野市のみなさんに呼びかけています。

【長野市】 若い頃サークル活動を一生懸命やっていた昔の青年たちが、三〇年ぶりの再会で、昔話に花が咲き、地元の東部文化センターで「友の呼ぶ声」を、上演しようではないかということになりました。

【戸田市】 戸田市では五月に現代座ホールの公演を見た石本誠

さんと角田道郎さんが取り組みを始めました。これまでの「虹の立つ海」や「約束の水」は会場の都合で隣の藤市での公演でしたが、今回は戸田市笹目コミュニティセンターでの上演です。地域での取り組みを大事にしようと呼びかけています。

### 【北海道八雲町】

八雲町はかつて現代座の北海道事務所をおいた町でもあり、一九九九年には「虹の立つ海」を五地域で上演したこともあり。当時の八雲町は北海道内浦湾に面した町でしたが、二〇〇五年に日本海側に面した熊石町と合併し、八雲地区と熊石地区とで構成される一つの町になりました。

そこでこれまで現代座を取り組んできた八雲地区は、熊石地区に呼びかけ、一つの実行委員会として取り組むことになりました。文化による新しい町づくりとして注目されています。

### 長野県安曇野市

9月25日（火） 14:00 19:00

穂高交流学習センターみらい

一般 2,500円 中高生 1,500円  
（当日 300円増し）

### 長野市

9月28日（金） 14:00 19:00

一般 2,500円 中高生 1,500円  
（当日 300円増し）

会場 長野市立東部文化ホール

主催 「現代座に集う会」友の呼ぶ声

長野市実行委員会

### 埼玉県戸田市

9月29日（土） 18:30

会場 コンパル（笹目コミュニティセンター）

一般 3,000円 中高生 1,500円  
（当日 200円増し）

主催 NPO現代座戸田公演を観る会

### 北海道八雲町

#### ◆八雲地区

10月5日（金） 19:00

会場 八雲町民センター

#### ◆熊石地区

10月6日（土） 15:00

会場 熊石福祉センター

一般 2,000円 中高生 1,000円  
（当日 300円増し）

主催 現代座八雲公演実行委員会

# 『遠い空の下の故郷』 ハンセン病療養所に生きて

二〇〇二年にハンセン病療養所をお訪ねして元患者さんのお話しを聞かせていただいたから、もう十年になります。少しでもまわりの人にハンセン病の差別のことを知っていただき、いっしょに考えたいと、聞かせていただいたことを「語り」にしてコツコツ公演してきました。

六月七月は二カ所で聞いていただきました。

六月二十七日(水)

小金井市緑センター・高齢者学級



現代座のある小金井市の緑町に公民館の分館である緑センターがあります。そこで市民が企画して毎年やっている高齢者学級は五月から十二月まで十五回の講座をやります。その講座のひとつとして企画していただきました。

それは委員のひとり並木さんが、いつも公演を観に来て応援してくれている現代座の会員で、今年の企画をたてる時に提案してくださったのです。地元の皆さんに聞いていただけるのは本当にありがたいことです。四十五人ほどの受講生は、本当に熱心に聞いてくださいました。終わったあと積極的に質問してくださいました。いつもは時間が無くて話せない歴史のことや、今の状況もお話しすることができました。地元の皆さんなので、きっとこれからもお会いできる機会があるでしょうし、現代座を知っていただいただけでも、うれしいことでした。

七月二十一日(土) 東京都狛江市

「話しカフェ」第三回



狛江駅のロータリーにある喫茶ノタリーノの二階の会議室を会場に、市原広子市会議員の「話し・カフェ」の企画として呼んでいただきました。

実は今年十月二十七日(土)に現代座ホールでパーカッション奏者の小幡享さんのコンサートがあります。その主催者の「SPOT」の大森洋子さんが四月に打ち合わせに来ました。いろいろお話しするうちに、大森さんは現代座の協賛会員になってくださり、さらに「このハンセン病の語りを私の住んでいる狛江でやりましょう」と言ってくれたのです。そして市原市議に声をかけてくださって、この公演が

実現しました。

この日はいつも演奏している吉野さんが都合がつかずに、松本真理子さんが演奏してくれることになりました。松本さんはアコーディオンとピアノが専門ですが、キーボードは慣れない楽器なので、このため何日も前から自宅に楽器を持ち帰り、演奏方法を工夫し、新しい世界を創ってくれました。



新しい演奏者・松本真理子さん

公演後はビールとお弁当での「カフェ」になりました。また新しいつながりが広がっていきそうな出会いの日になりました。(木下美智子)



### これからの予定

- 8月8日(水) 長野県辰野町 明光寺おせがき法要
- 10月3日(水) 曹洞宗北海道第一宗務所研修会
- 10月中旬 北海道八雲町管区の中学校巡回

## 壁が落ちた！ 騒動記

四月のある日、長野県下を歩いていたら所へ、電話がありました。それは現代座のお隣の大企業社員宿舎にお住まいの方からでした。

「先日の強風でお宅の壁がうちの駐車場に落ちています。早く修理された方がいいですよ。危険なのでご連絡しました」「えーっ！ 壁が落ちた？」「すぐに片付けてもらえますか」「はい！」。とはいえ、どうしたらいいの？ 今現代座には専従がいなかったため、事務所に人がいない時には木下の携帯に転送されて来るのです。

電話では様子がよく分かりません。大変なことになったのかもしれない。どちらにしても専門家に見てもらわなくては、いつも建物のことで相談ののつてくださっている工務店の守屋さんに電話したら、すぐに見に行ってくださいました。私もすぐ東京に飛んで帰りました。

去年の3・11の揺れで下水管が破損したとき、どうやら外壁の一部にはがれが起きたのだろうということでした。二階から三階の部分にかけて内部の鉄骨がむき出しになっています。この様子ではさらに広がりそうです。業者によつては、「全面的に張り替えると八百万以上は

壁を見上げる守屋さんと木下



足場と全面シート貼りが完成



かかるかもしれない」と云います。私はもう真つ青です。

現代座にお金が無いことを知っている守屋さんは、建設当時の設計図と丁寧に見比べながら、「こんな大事な会館をつぶすわけにはいかないんだから、いろいろ知恵を出し合いましょ。なんとかなりますよ」と励ましてくださり、幾通りかの見積もりを作ってくださいました。

修繕費用の積み立てをきちんとしておかなかつたことを後悔しましたが、後の祭りです。しかし、これ以上隣に壁が落ちたら大変です。なんとしても急いで足場を組み、シートでカバーをしなくてはなりません。それだけでも百万はかかります。「足場代くらい何とかかりますよ」と、保険を担当してくださいさつている太田孝夫さんが奔走してくれます。

ちょうど「友の呼ぶ声」公演の準備中で、その話を聞いた塩尻市の竹林さんが「うちに足場用の鉄パイプがあるから、持つて行って足場を組み足しにしたらどうか」と言ってくださいました。そこで公演の帰りにみんなで鉄パイプをトラックに積んで持つて帰って来しました。

小金井では、商店会連合会長の今井さんが心配してくださり、足場組みを引き受けてくれました。「専門家を何人か頼まなくてはいけないから多少はかかるけど、払える範囲で少しずつ払ってくれたらいいですよ。今の現代座の財政状況では、腰を据えて何年かかけてやるしかないでしょう。

黒い部分が新しい壁を張った部分。本当はこの上に塗装をかけるのだが、それはこれからの



今井さん



鈴木さん

大森さん

竹林さん

ぼくも一緒に考えますよ」と言ってくださいました。そのおかげでなんとか東の壁一面に足場が組まれシートが張られました。これで一応壁が隣に落ちる心配は無くなりました。

これからどうするかと、重苦しい話し合いの中で、突然木村快が言いました。「自分らで直そう。自分の家は自分で修理するのが当たり前だ。おれがやる」。快さんは確かに十代の頃大工の弟子だったそうですが、今は七十六歳。しかもメニエル病のめまいで療養中です。足場作業の経験のある俳優の寺崎、黒沢もさすがにあって、「そんな無茶な……」。しかし、快さんがやるって言っただつたら、やるしかないか」というわけで、みんなで準備を始めました。

そんなとき、障害者支援のNPO「Paga a Paga」をやっている岩尾さんが「親切な大工さんがいるのよ」と鈴木さんを紹介してくださいました。鈴木さんはすぐ飛んできてくださり、「まずは今穴が空いている部分と、周囲の危険な部分を修理しましょう。日曜なら手伝えますから」と、仲間の大工さん大森さんと二人で材料と必要な機械を持つて来て、モルタル壁を一定の幅で切り出してくれました。足場作業経験者の寺崎と黒沢がそれを窓辺へ運び、中村、西河、高橋がそれを受け取って館内を通つて外へ運びだします。私はハラハラしながらただ見守るだけです。

壁をはがしてみたら、内部の状態は全く問題ないことがわかり、修理は一日で完成しました。あとは足場を利用して点検し、少しづつ直していきけるでしょう。ここには書ききれませんが、心配してくださった方、いろいろ動いてくださった方は他にもたくさんおられます。感謝の気持ちでいっぱいです。本当にありがとうございます。やっぱりここをつぶしてはいけません。本当に人々の役に立ついい活動をしていかなくては、改めて思いました。(木下美智子)

NPO現代座を支える人々

## 第十一回 卜部美佳子さん

記 武本英之



卜部さんと現代座の前身・統一劇場との出会いは、道央の穂別町にいた小学6年生の時です。お父さんが山田洋次監督の「同胞」(はらから)を観てファンになり、同劇団が北海

道に巡演に来る度に親子で追っかけをしていたそうです。

その後、お父さんの勤務の関係で札幌で暮らすようになってから登校拒否になり、リースクールに通っていたのですが、自分たちの体験を元に芝居を作って上演したことから、小劇場や商業演劇などを月に何本も観たり、アマチュア劇団の手伝いなどをする中で、再度現代座の舞台「星と波と風と」を観て、他の舞台とは違う感動をもちました。

19歳の時、現代座の「朝の風に吹かれて」を上演する実行委員会に参加しました。「現代座の実行委員会では、私のようなフリーターも、学校の先生、医療関係者、自営業者などなど、職種も世代も違う様々な人たちが夜ごと集まり、公演の成功に向けて議論したり、アピールに出かけたり、宴会をしたり、ほんとに楽しかった。だけど、その場をずっと支えていた劇団員の姿を見て、劇場を準備するにはこんな仕事もあるのかと思っただけです。「劇場をつくる仕事をやりたい」と、入団試験を受け合格。有明海の諫早干拓問題を扱った「虹の立つ海」では快さんの現地取材にも助手として出かけました。公演班ではずっと音響の仕事を担当していました。

卜部さんは現在、子育ての問題もあり、札幌から離れられません。そこで、現在は現代座ホームページの仕事を担当しています。ホームページの立ち上げは独力で勉強しました。

今年4月、卜部さんは出産以来3年ぶりで総会に参加しました。卜部さんの報告は、「NPO現代座のホームページの現状について」です。2歳になった央(ひろ)君をあやしむながらの微笑ましいご報告でした。

会員の皆さん、年間8千人の方が1万回もNPO現代座を訪問していることをご存知でしたか。うかつにも私は知りませんでした(認識していませんでした)。驚きました。この数字は東京・小金井市にある現代座に実際に足を運んでくださった方の数字ではありません。2002年に現代座がNPO法人になる頃、開設したインターネット上のホームページのアクセス数です。

卜部さんの報告によると、現代座ホームページ(以下HP)への2011年度(2011年3月～12年2月)のアクセス状況は、8千157人の方が1万815回、ホームページに訪れ、HP上の幾つかのページを2万9481回閲覧しているそうです。俗にいうヒット数に当たる閲覧数を月平均すると約2千500回になります。毎月2千500回、現代座のHPをめくっている方が存在するのです。現代座の会員数は約700人ですから、同じ方が重複してアクセスしているとしても、身内の会員だけではこの数字に達するのはやや困難でしょう。ネット社会をあれこれみません。

卜部さんの報告を続けましょう。HPのどのページへのアクセスが多いか。一番はやはりHPの顔である表紙「NPO現代座」で8千555回、二番目が代表の木村快さんが力を入れる「ブラジルありあんさ通信」で3千199回、次いで「現代座会館」2千581回。以上が上位3位。どんな文字で検索してこられているかをみる検索キーワードは「現代座」が圧倒的に多く2千715回、次いで朗読劇で知られる「ハンセン病」421回、現代座の前身「統一劇場」396回と続きます。地域別では、東京が最も多く1千728回、次いで愛知251回、神奈川238回、長

野142回、北海道137回の順です。

卜部さんによると2011年度の訪問数約1万回は前年度に比べて2.0%増えましたが、過去を振り返ると2004年度の1万8557回をピークに漸減し、3年前の2009年度に一時9千810回に落ち、現在、かろうじて1万回を維持している状況のようです。

ちなみに筆者が調べた一般のHPの月間閲覧数は「介護110番」77万回、福島フラガールの「スパリゾー トハワイアンズ」65万回、東京・立川の「昭和記念公園」40万回、「クロネコヤマト引越センター」35万回といった具合。単純比較すればそれまでですが、地域に開かれた劇場を標榜する現代座としては「年間の閲覧数約3万回・訪問数約1万回」は「たかが」で形容する数字ではなく、「されど」で形容すべき数字ではないでしょうか。されど1万回訪問される方々がいる限り現代座の存在理由と役割があります。

HPを管理する卜部さんは、札幌に住み、「保育園とアールバイト先と家との往復の日々」を送りながら、朝晩のメールのチェックと毎月のHPの更新をしています。「札幌は今週、雪マークの予報ばかり。嘘だといってほしいです」(4月1日付)、「札幌もようやく桜が咲き始めました」(5月1日付)と、HP更新を知らせるメールに添えられた季節感溢れる一言が心を和ませてくれます。

今、卜部さんは親子で舞台を楽しむことも劇場にも参加しています。「いわゆる鑑賞が目的ではなく、親子が集まって仲良くなりながら、遊び、子育ての話をし、舞台の日まで準備をするプロセスを大事にしていることが現代座と共通点だからです」。その中で、生の演劇が持つ力が、孤立しがちな子育て中の母親たち(自分も含めて)に必要とされていることを実感しています。

「当面は上演にかかわれませんが、数年後には音響スタッフもまたやりたいです。それまでは、離れていてもできるインターネットの世界で協力していきます」と央君を抱っこした表情は明るい。(了)

武本英之(東京交通新聞記者・NPO現代座正会員)

## 現代座会館の催し

### 劇場講座始まる

人が劇場に集まれば心にどんな変化が起きるのか

六月から毎月一回木村快による「劇場講座」を開催しています。演劇活動に関わる者として、もう一度自分たちの仕事を見つめ直してみたいからです。

演劇の勉強と云えば、表現技術のことばかり気にしがちだけど、ほんとうは観客の心の中ではどのようなことが起こっているのだろうか。そして自分たちはちゃんとそれに応えているのだろうか。

参加者はさまざまな場所で演劇活動にかかわっている経験者だけでなく、まったくの未経験者も何人かいます。今、わたしたちに必要なことは、技術の問題以前に、本当はどんなことが求められているのだろうかを一緒に考えることです。むしろ演劇に関わってこなかった人たちの意見や感覚を大事にしたい講座です。

第一段階は「劇場の歴史」について考えます。そもそもその芸能の始まりは、コミュニティの再創造のために生まれた集落のお祭りであったこと、それがどのように発展して現代に至っているかを考えて見ようと云うことです。だとしたら、現代のコミュニティの実態はどうなのか、どのようなことが求められているのか。

第二段階は「劇場の技術」について取り組みます。劇場技術にマニュアルはなく、その人独自の力を発見し、協力しあわなくてはなりません。新しい劇作品を創るために、どんな内容、どんな上演の仕方、自分たちの個性を生かした舞台・劇場のあり方を検討します。

## SPレコード雑談会

SPレコード雑談会は月一回、時代と歌を考える会です。検閲制度の厳しかった大正・昭和時代、人々はどうのように歌詞の裏側を読み取りながら歌ってきたのかなどをそれぞれが思いを語る雑談会です。

第十四回は「ゴンドラの唄」をテーマにしました。

黒澤明監督の映画『生きる』（一九五二年）で広く知られた歌です。ガンを宣告された平凡な市役所の市民課長が、はじめて市民のために生きようと決意し、さまざまな妨害を乗り越え、子どもたちのための公園を実現させ、雪の降る夜、ブランコに乗ってしみじみと口ずさむ歌が「ゴンドラの唄」でした。

この歌、実は大正四年に島村抱月が芸術座で上演したツルゲーネフの『その前夜』というお芝居の中で、松井須磨子演ずる主人公エレナが歌う劇中歌でした。ロシア貴族の娘でありながら、親を捨て家を捨て、祖国の独立のためにブルガリアへ旅立つ夫と行動を共にしますが、途中、夫はイタリアで病死します。その前夜、「でも私は後悔しない。あなたの意志を継いで、革命の地へ向かう。だから、わたしたちには今のこの時しかない」と歌うわけです。ツルゲーネフはそんな「強い女性」を描きたかったのでしょうか。

さまざまな歌手の「ゴンドラの唄」を聴いてみました。松井須磨子、佐藤千夜子、田谷力三、伊藤久男、森繁久彌、田端義夫、美空ひばり、春日八郎等々。それぞれどんな解釈をして歌っているのか。感じたことを自由に語り合いました。



## 平右衛門プロジェクト

毎月一回、平右衛門プロジェクトの勉強会が開かれています。NPO法人「シニア・SOHO」とNPO現代座による協同作業で、武蔵野台地を拓いた農民出身の町おこしリーダー川崎平右衛門の実像を探りながら、自立と協同の原点を見つめ直し、子どもや市民を対象にした語り物や音楽構成劇を創作しようとする集まりです。関心のある人の参加を求めています。

早いもので、すでに勉強会は二十一回を数え、やっと当時の古文書をたしかめる作業にも慣れてきました。

昨年十一月、第一段階として子ども向けに『武蔵野台地の夜明け』と題した朗読劇を第三小学校の子どもたちを対象に上演してみました。なにしろ五〇分におよぶ上演を身じるぎもせず見入っている子どもたちの姿に、参加した大人たちのほうがびびりしてしまいました。

そこで、今年二月には、まったく同じ上演方法で市民の方々に観て貰い、意見を出してもらいました。このままの方がいいのじゃないかという意見もかなりありましたが、大人の市民を対象とする場合には、もう少し現代の町おこし問題とどう対応させるかを考えてみようということになりました。

今回は、町おこしの原点はあくまで「自立と協同」であり、さまざまなエピソードからどんな話を組み立てるかが話し合われました。



## 『創設八十年』（アリアンサ移住地八十年史）が完成

木村 快

NPO現代座は国際支援事業の一つとして、ブラジル・アリアンサ移住地八十年史『創設八十年』の企画・発行について支援を続けてきました。その『創設八十年』がやっと完成しました。これは日本語・ポルトガル語併記で、おそらく移民自身による最後のブラジル移住史になると言われています。

アリアンサ移住地は一九二四年（大正十三年）の開設ですから今年すでに八十八年になります。日系ブラジル人は一五〇万人と言われますが、今なお日本語を話し、日本文化を継承する移住地はアリアンサだけと言われています。そしてアリアンサのユバ協同農場は二〇〇八年にブラジル政府によって日系団体としては初の文化功労賞を受賞しました。

『創設八十年』の編纂には七年もかかってしまいました。最大の難関はアリアンサ移住地の歴史を語る上で欠かせない日本政府の「海外移住組合法」についての資料が、日本でもブラジルでも見つからないためでした。

現在、日本の歴史年表、百科事典類にも「海外移住組合法」の項目はありません。移住問題を扱うJICA移住博物館にも資料はありません。まさに闇に消された移住法です。

「アリアンサ」とは協力協同を意味する言葉です。移民会社によって放置された移民の現状に心を痛めた人々が、あくまでも協同組合原則にもとずいて、医療・教育設備を備えた協同の村を建設しようと努力した大変珍しい移住地です。日本にはすでに産業組合法が

あり、建設資金の低利融資が可能ならずでしたが、政府はアリアンサ建設への適用を認めず、やむなく民法による移住組合法成立に四年の歳月をかけます。

しかし、一九二七年（昭和二年）に政府は国営移住地をつくるための「海外移住組合法」をつくり、またまたアリアンサへの適用を拒否します。アリアンサは国策会社と闘いつづけ、ついには併合されます。それでも住民は協同の精神で自立して行こうと、さまざまな苦難を乗り越えて現在に至っています。

わたしは専門家ではありませんが、日本人の一人として、二十万人近い移民を送り出した「海外移住組合法」の実態を明らかにする必要があります。実はアメリカ占領下の昭和二十五年第七回国会で、実態を明らかにしないまま、密かに廃止されています。

二〇〇四年に田中康夫長野県知事一行がアリアンサ移住地を訪問された際、「信濃海外協会が中心となったアリアンサ移住地の歴史については長野県の責任で書き直す」と約束されましたが、知事が代わったためについて実現することはありませんでした。

国連は二〇一二年を「国際協同組合同年」として、お互いの顔の見える協同に立ち返ることを呼びかけています。『創設八十年』はそれに応える事業でした。できることなら送り出した日本人の側にも理解して貰いたく、わたしは『共生の大地アリアンサ』を執筆中です。どうかよろしくご支援をお願いします。

NPO 現代座は会員によって支えられています。

- 年間4回発行の活動レポートをお送りします。
- 現代座会館の公演、講座など催し物の参加料を割引します。
- 会員による企画行事をお知らせします。
- お申し出があれば、上演舞台の録画DVDをお送りします。

ぜひ会員になって支援してください

- ★年会費（現代座レポート購読料を含む）
- 一般会員 3,000円
- 協賛会員10,000円（1口以上）
- 郵便振替口座番号 00110-7-703151 NPO現代座